

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方<sup>473</sup>

< 1968年 > の向こう側へ

寺山修司は子供の頃に熱中した「かくれんぼ（隠れん坊）」を、大人になっても忘れられなかった。というより、かくれんぼに夢中になっていた彼は、ふとあたりを見回すと、日がとっぴりと暮れるなかで、自分が独り立っているという感覚を生涯引きずって生きてきた。かくれんぼを「悲しい遊び」と捉えた寺山は、いつまでも探しつづけるかくれんぼの鬼はやがて迷子になり、年を取っていくというイメージを喚起しつづけた。他方、隠れる側は鬼に見つからないように、いつまでも隠れつづけた。「いつまでも隠れているがいい。隠れている間に世の中が変わってしまっても知らない」というセリフが鬼から発されるが、だがかくれんぼの鬼もまた、探しまわるのに夢中になって、世の中が変わってしまっていることに気づかなかつたにちがいない。

60年代末の「大学闘争」を担った学生たちのことを考えると、同時代に生きた寺山修司の「かくれんぼ（隠れん坊）」が想起される。学生たちは、見つからないものをいつまでも探しつづけるかくれんぼの鬼だったのだろうか。そうするうちに迷子になってしまったのだろうか。それとも、隠れる側にいつまでも佇んでいたのだろうか。大学の建物を占拠して籠城するうちに、隠れることを覚えてしまったのだろうか。もちろん、大学当局も国家権力も、この「禁じられた遊び」を許しはしなかった。学生たちがバリケードを解体されて、大学の建物から路上に放り出されたとき、初めて世の中の変化に彼らは直に晒されることになった筈である。もう「かくれんぼ（隠れん坊）」は打ち切られたのだ。学生たちの前にはもはや二本の途しかなかった。

「遊び」は終わったのだから、世の中の変化に自分を合わせて生きていくようにすること - それが、大半の学生たちに大きく太く開かれている途であり、多くの者がためらいながらも、その途を進んだ。いや、まだ「遊び」は終わっていないという声が、反撥するように当然提出されてくるが、その途がか細く、狭く閉ざされているようにみえたことはいうまでもない。日本でかくれんぼが出来なくなったのであれば、日本の外で続ければよいではないか、といて北朝鮮や中東へ飛び出していく者もいれば、かくれんぼを禁止する国家権力に対する武装闘争を徹底的に展開すればよい、と主張する者もいた。しかし、どこにいるかわからないほどのごく少数の者が、寺山修司のようにフィクション（演劇）のなかではなく、現実生活のなかでかくれんぼの鬼として生きつづけようとした。

大学から放り出された学生たちが、受け入れるか受け入れないかにかかわらず、一様に直面した世の中の変化が、大阪万博に象徴される「繁栄の時代」であり、かくれんぼ

する場所を均質化してなくしてしまう「空虚の時代」であった。もしかくれんぼを続けるなら、その空間をつくりだす闘いから始めなくてはならない困難な時代を迎えることになったのである。大阪万博のシンボルタワーである岡本太郎制作の「太陽の塔」に昇って、「万博をやめるまで降りない」と約一週間籠城する若者も出現したが、その行為自体が反万博のアピールよりも、より大きく万博のシンボルタワーを浮かび上がらせる象徴行為になってしまうような、勢いのある「繁栄の時代」であり、なにもかも呑み尽くしてしまうブラックホールのな「空虚の時代」にほかならなかった。大阪万博は最先端のテクノロジーを結集し、明るい未来へのテーマとして「人類の進歩と調和」を提示したが、思想をもたず、「問題」を排除する方向に位置するがぎり、「繁栄」のなかでの「空虚」がより一層押し進められることになるのは、みえる者にはみえていた。「1971年」は70年の期待を背負って、やってくる。

《1971年は、繁栄の時代をになう大衆の年 - 「大衆元年」とも言うべき年である。

前年の8月、東京都知事・美濃部亮吉は休日の盛り場に乗り入れる車をストップさせ、車道を歩行者に開放する歩行者天国を始めた。1971年の7月、その中心地でもあった銀座に、ハンバーガーのマクドナルドが第1号店をオープンさせる。それまではお行儀が悪いとされていた立ち食いが当たり前になり、ファースト・フードの時代が日本にやって来る。9月には、日清食品がカップヌードルを発売する。鍋もどんぶりもいらぬ。お湯さえあれば、どこでもカップヌードルは食べられるのである。3月には、東京の多摩丘陵を削っていた工事が一段落、出来上がった多摩ニュータウンの入居が開始される。6月には、日本で最初の超高層ホテル、京王プラザホテルが新宿で営業を開始する。

銀座のマクドナルド、多摩のニュータウン、新宿の超高層ホテル - 東京都といういたって小さな行政区域に登場したこの三つがどんな意味をもつことになるのか、1971年の段階ではまだよく分からなかつたろう。

日本マクドナルドが第1号店として選んだのは、銀座の三越だった。立ち食いのファースト・フードという、それまでの日本文化の常識を覆すものは、日本一の盛り場・銀座にある、日本で一番格式の高いデパート・三越の一角に登場した。それを決断した三越銀座店の店長は、後に三越の社長となり、1982年「古代ペルシア秘宝店」の贋作騒ぎで 愛人 とも噂された竹久みち共々逮捕され、「なぜだ！」の一言を残してクビを切られる岡田茂である。

1960年代の終わり頃、既に銀座には盛り場としての地盤沈下が起こっていた。銀座の目抜き通りを占めるのは銀行の店舗で、銀行のシャッターは午後の三時になれば閉まってしまふ。仕事帰りの人達が「銀座ブラ」をする頃には、メインストリートが閉まっている。一等地・銀座に店舗を求めて、日本の金融資本は、その町を変質させてしまった。しかも、都心に通う人達の住まいは郊外に移り、繁華街の中心は、新宿・渋谷・池袋というターミナル駅に移りつつある。ファッションの中心は若者である。たいした金を持っているはずのない若者達は、しかし刹那的かつ衝動的に金を使う。若者客をつ

かめない店は、流行からはずれた「古い店」になって行く。1960年代末、日本のサブカルチャー・シーンの中心となったのは、「若者の町・新宿」だった。時代は、上等な顧客を対象とする老舗三越のやり方とはズレを見せて来たのである。

三越の本店は日本橋にあったが、その日本橋に昔日の輝きはない。1999年1月に337年の歴史を終える日本橋の白木屋は、1967年に「白木屋」の名を失い「東急デパート」となっている。日本橋に軒を並べて三越と白木屋が繁栄を競い合っていた時代は、終わりつつあった。東京の中心は西へ移りつつある。新宿にあった広大な淀橋浄水場が閉鎖され、その跡地には「副都心」なるものが建設される計画が進んでいた。その第1号となるものが、6月に開業した京王プラザホテル - であればこそ、多摩ニュータウンである。多摩ニュータウンから伸びるのは、新宿へつながる小田急・京王の電車線路だった。

銀座の地盤沈下は、銀座三越の売上不振へとつながる。日本マクドナルドの第1号店がここに出来たのは、銀座に客を呼び戻そうとする、岡田茂の決断だった。「歩行者天国でハンバーガーを食う」 - それで、1971年夏の日本に登場した最もファッショナブルな光景だった。

銀座三越はヤング路線を歩んで甦り、その成功で岡田茂は三越の社長になった。老舗三越は新しい時代に再生したように見えた。しかし、時代はもっと大きな勢いで変わっていた。マクドナルドのハンバーガーは、別に銀座の一等地にふさわしい食べ物ではなかったからだ。その手っ取り早さとお行儀の悪さは、名門銀座よりも新興新宿の方にふさわしい。マクドナルドの店舗が、三越の一角に限定されていなければならない理由はどこにもない。客が集まるとなれば、どこにでも進出して行く。マクドナルドと、それに追従するハンバーガー・チェーンは、日本中に広がって行く。若者にとって、別に老舗三越はどうでもいい。重要なことは、それが近くにあるか遠くにあるかというだけである。

若者を生み出す家庭は、都心の銀座とは遠いところに作られて行く。人は、都心から離れて作られた新しい住宅地に住み、その人口は新しい繁華街を生む。1982年に没落する三越社長にとっての最大の敵は、繁栄と共に生まれた都市の空洞化 - スプロール現象だったのである。

東京の南西部にある多摩丘陵を切り拓いてニュータウンを造るという計画がスタートしたのは、1966年だった。多摩ニュータウンは、それ以前から続いていた団地の大規模発展形だった。日本の首都東京に企業は密集して、しかし狭い東京に、多くの就業人口を住ませるだけの土地はない。まだ技術の進歩を信じていた日本人は、人口の町を造ることを考えた。

その場所が、なぜ猿が住むような多摩丘陵なのか。東京はまだ、「東京」であることにこだわっていた。

やがて東京は膨れ、千葉県も埼玉県も神奈川県も、東京の通勤圏となる。しかし1966年の段階で、東京はまだ「東京」の中に収束出来ると思われていた。「東京」の外

から通うことは、「都落ち」のようにも思われていた。出来たばかりの多摩ニュータウンはまだまだ不便だったが、しかしそこには「新しい都市」という夢があり、そこは「東京」だった。夢の下に、家を求める家族達は移り住んだ。

多摩ニュータウンは広大な 新都市 だったが、増え続ける東京の人口すべてを吸収出来るものではない。東京に通う人達の住まいは、「首都圏」を構成する隣接県へと広がって行く。その広がりにはまた、ハンバーガー・チェーンの広がりや、カップヌードルの販売量の増加と軌を一にするものでもあろう。

若い夫婦中心の新家庭に、伝統的な生活習慣はなじまない。近代日本に「市民生活の模範」を提供し続けて来た百貨店の時代はやがて転換し、スーパーマーケットの時代が来る。安価で均一で、どこにでも店舗がある。忽然と開かれた新興住宅地は、駅前の大型店舗を唯一の頼りとするしかない人工の町なのである。

昭和30年代、休日の日本人はおしゃれをしてデパートに行った。日本各地の盛り場の中心にはデパートがあった。1970年代に、人の生活の中心はスーパーマーケットに移り、1980年代も後半になると、盛り場の中心に必須となるものは、「おしゃれなシティホテル」になる。日本人は、そのように成熟したのか？ 成熟と共に年も取った。

ある時一斉に入居を開始された人工の都市は、いずれ「老人だらけの町」に変わってしまう。1971年、その未来はまだ見えなかった。》

1970年に突入した「繁栄の時代」は、1971年にどのような徴候を生み落としていったか。その徴候とは、ハンバーガーのマクドナルド第1号店のオープンであり、日清食品のカップヌードル発売であり、東京・多摩ニュータウンの入居開始であり、日本で最初の超高層の京王プラザホテルの営業開始である。3月に起こった赤軍派による資金集めのための銀行強盗などのM作戦も、5月に8人もの女性を殺して逮捕され、世間で取り沙汰された大久保清の連続婦女誘拐殺人も、また9月に三里塚の第二次強制代執行で3人の警官が死亡したことも、橋本治にすれば、記述するに足りなかった。もし彼がそれらの事件に触れることがあったとしても、大久保清の殺人であれば、白色のマツダ・ロータリー・クーペに乗り、ロシアふうのルパシカを着用し、ベレー帽を被って裕福な画家に見せかけて、「モデルになってくれませんか」「高校の教師だが、結婚相手を探している」と女性を狙ってドライブに誘う手口そのものが、そして声をかけられた127人の女性のうち、35人が誘いに乗ること自体が、「繁栄の時代」を前提とせずには成り立たなかったとみるにちがいない。赤軍派のM作戦にしても、みようによれば、「繁栄の時代」と無縁でないかもしれない。

日本マクドナルド第1号店が銀座三越の一角に登場したことや、その成功によって三越銀座店の店長が後に三越の社長になったものの、マクドナルドのハンバーガー・チェーンが東京の他の繁華街に次々と広がって、銀座の一等地以外の場所でも食べられるようになるにつれて、盛り場の中心が銀座から新宿・渋谷・池袋などに移りつつあるなかで、スキャンダルによって失脚したことに記述が多く割かれている。三越の衰退は都心

を象徴する銀座の衰退でもあり、都心への人口集中や地価高騰により、人々は地価の安い郊外に居住地を求めていくようになる。その巨大な需要を見込んで山が切り崩され、海が埋め立てられていく。その先駆けが、東京の南西部にある多摩丘陵を切り拓いて造られた「多摩ニュータウン」であった。人口の移動と共にファースト・フード店や他のさまざまなショップも重心を移していき、都心は空洞化に晒されていく。

東京を襲ったこのような激変の波は、やがて日本中の地方都市のすべてを覆い尽くし、都心の空洞化は都市の空洞化として全国の隅々にまで貫かれていく。日本マクドナルド第1号店がどこに登場しようとも、また三越銀座店の店長が後に三越社長になってスキヤングルに見舞われ、失脚していこうとも、どうでもいいことのようにみえるが、橋本治は1971年という年に、繁栄というものが都市のなかでどのようなかたちをとって自らを表現するに至ったのか、を描写しているのだ。彼は直にはいっていないが、都市の空洞化は都心から遠く離れた郊外に移り住んで、そこから長い時間をかけて都心の仕事場に通勤する勤労者生活に内在する空洞化でもあった。郊外には若い夫婦が移り住み、かつての繁華街であった都市には老人が住み、しかし、《ある時一斉に入居を開始された人工の都市は、いずれ「老人だらけの町」に変わってしまう。1971年、その未来はまだ見えなかった。》

1971年という年のデザインを描くのに、そうしたことが取り上げるに値するかどうかはわからないが、1971年にはそうしたことしか記述するものがない、と橋本治はいつているように聞こえる。若者達が忍びよる「繁栄」＝「空洞化」の時代にむかって石を投げ、角材を振り回して路上を占拠し、大学に籠城して永続的なバリストを高らかに宣言するという、激しくも熱中した季節が過ぎ去ると、人々は抵抗の精神を武装解除されたかのように「繁栄の時代」に乗せられ、ハンバーガー・チェーンがオープンすれば、それを享受する波に遅れまいとし、我々を更なる繁栄へと駆り立てる時代の勢いに抗う「石」は、もはやどこにも見出されなくなっていった。繁栄を素直に享受することは、技術革新の成果のみを素直に受け入れることと軌を一にしていた。自分が立っている足元を否応なしに突き崩さざるをえなくなるような生き方と全く無縁になるにつれて、都市の空洞化現象は個々人の空洞化をも大きく映しだしていたようにみえる。しかしながら、未来しかみつめない繁栄の時代が、どのような過去を置き去りにしてきたのか、という問いを異様なかたちで突き出してくるのが、1972年である。

《1972年1月、今や日本人専用の観光地と化した感もあるグアム島で、元日本兵・横井庄一が発見された。翌々年の3月には、フィリピンのルバング島で元陸軍少尉・小野田寛郎が発見され、さらにその年末にはインドネシアのモロタイ島で、台湾出身の元日本兵・中村輝夫も発見される。三人とも、まだ太平洋戦争は終わっていないと思っていた。1972年は、「残された戦後処理」の一つである沖縄の日本復帰が果たされ、日中国交回復がなる年でもある。太平洋戦争の終結から27年がたって、しかしまだ情報化社会ではなかった。今となっては、「1970年代初めの地球上には、まだ情報が

ら隔絶された隠遁地となる場所が残されていた」と言いたくなるような、元日本軍兵士の発見である。

2月になると、追い詰められた学生運動の生き残り - 逃亡中の連合赤軍のメンバー達が、群馬県でリンチ殺人、長野県であさま山荘銃撃戦を惹き起こす。別の赤軍のメンバー三人はイスラエルに渡り、5月にテル・アヴィブのロッド空港で銃乱射事件。二人は射殺、一人は逮捕である。太平洋戦争も 激動の1960年代末 も、終わらない人の中では終わらないのだが、 激動の1960年代末 の日本で最も評判の悪かった人物、佐藤栄作が、この年総理大臣を辞任する。遂に一つの時代は終わるのである。

佐藤栄作が総理大臣となったのは、東京オリンピックの終わったばかりの1964年11月。それからの日本は「最長不倒距離」と言われたこの人の長期政権下にあった。「人事の佐藤」と言われたこの人がどのような功績を果たしたのか、私にはよく分からない。東京オリンピックから日本列島改造計画に至るまでの足掛け9年の時期 - その激動の時代の日本を、おそらくは最も日本人的な日和見主義によって導いたのが、この人だろう。沖縄返還の問題では「売国奴」と言われた。政治献金の問題では「財界の男メカケ」と言われた。しかし彼は動じなかった。引退後の1974年にはノーベル平和賞を受賞したが、彼が世界平和にいかなる貢献をしたのか、私は知らない。

1972年6月、引退表明の記者会見では、堪忍袋の緒が切れたのだろう。彼の悪口を書き続けた新聞記者達を「嫌いだ」と言った。目の前に座る記者達を無視して、後ろに並ぶテレビカメラに「テレビは前に出なさい」と言った。怒った新聞記者達はゾロゾロと席を立ち、テレビカメラはその様子と、ガラ空きになった記者席の向こうに座る総理大臣の孤独を映し出した。1972年5月の沖縄返還はこの人の手によって行われ、復帰した沖縄には米軍基地もついて来た。沖縄復帰が悪評タラタラだったのは、この人によって行われたからかもしれない。

東大出の可もなく不可もない官僚上がりの優等生・佐藤栄作の後を受けて、1972年の7月に総理大臣となったのは、小学校しか出ていない田中角栄だった。下駄履きでダミ声、東京の目白に錦鯉のいる豪邸を構えた浪曲好きの田中角栄は、日本人の憧れる「立志伝中の人物」だった。後継総裁を目指した田中角栄は、佐藤栄作の引退表明直前に『日本列島改造論』を発表する。それまでの日本中の不満をすべて引き受けて佐藤栄作は退き、1972年の日本人は、大規模な土木工事と土地の値上がりがすべてであるような時代を、 明るい未来 と錯覚する。まだ表向きにはなんの 問題 も発生させていなかった田中角栄は、9月になると中国へ飛び、日中共同声明を発表する。日本と中国は国交を回復し、11月には二頭のパンダがやって来る。不満だらけの沖縄復帰とは対照的な 明るい日中国交回復 は、もしかしたら、それが佐藤栄作の手によってなしとげられたものではなく、おまけのパンダがいたせいなのかもしれない。二頭のパンダと共に、日本はバブル経済の門口へ立つのだ。騒がしく揺れた1960年代末期の日本は、1970年の月の石とこの年のパンダによって、あっさりと「経済大国」へ変身

し遂げたのかもしれない。

そんな1972年の日本で、一人の女性スターが退場し、別の女性スターが登場する。結婚して引退するヤクザ映画のヒロイン - 「最後の映画スター」と言われた藤純子と、後のニューミュージックの女王、荒井由美こと松任谷由美の歌手デビューである。

1968年に公開された藤純子主演の『緋牡丹博徒』は、1972年初めの第8作『緋牡丹博徒仁義通します』で完結。引退記念映画『関東緋桜一家』を最後にして、彼女はスクリーンを去る。高度成長の時代は、まだまだ貧しい時代でもあった。経済成長の中で置き去りを食わされている日本人の欲求不満を代弁したのがヤクザ映画であり、そこに咲いた虚構中の虚構と言えるものが、藤純子の演じた清純なる女ヤクザ・緋牡丹お竜だった。彼女を失って、全盛を極めたヤクザ映画の時代も終わる。豊かさを求める悪い新興ヤクザと、仁義を重んじる旧派のヤクザとの戦いは、必ず旧派が負けた。負けることと引き換えに、善なるヤクザは美学を引き受けた。「緋牡丹お竜」の退場と共に、そのヤクザ映画の公式も崩れる。ヤクザ映画はヒロインの退場と共に 美学 を失い、猥雑な 実録路線 に移る。1973年から始まる『仁義なき戦い』のシリーズで、ヤクザ達は存分に猥雑で薄汚い。ロクでもない親分に翻弄される若いヤクザ達は、もう 正義 ではいられない。凄絶と悲惨にその 終わり を賭けるだけになる。

ヤクザ映画の美学が終わる年、後のニューミュージックの女王は『返事はいらない』で歌手デビューする。1972年、大学に入った荒井 - 後の松任谷由美は、全共闘の時代の痕跡がまだ残るキャンパスの風景を、ただ「汚い」と見た。新しい時代のヒロインは、まだ残る古い男達の姿を、あっさり一蹴した。

若者の心情をストレートに表現する「日本語のフォークソング」は、関西系フォークシンガーの出現によって始まる。1967年にはフォーク・クルセダーズの『帰ってきたヨッパライ』、1968年になって高石友也の『受験生ブルース』、岡林信康の『山谷ブルース』『友よ』等である。関西系フォークソングの特徴は、強いメッセージ性と笑いだ。1970年代になると、そこに叙情性が加わり、メッセージ性は薄れる。1973年の大ヒット曲、「四畳半フォーク」などと言われた南こうせつとかぐや姫の『神田川』は、フォークソングからメッセージ性を切り離す里程標となるものだろう。

若者達はまだ貧しく、その心情を歌ってフォークソングは歌謡曲と接近し、やがて離れた。フォークソングは、「ニューミュージック」へと変わる。フォークソングからニューミュージックへの変化は、「貧乏からオシャレへの変化」である。ニューミュージックは「俗に冒されないオシャレ」を守って、歌謡曲との間に一線を引いた。ニューミュージックの女王は1972年に登場し、やがて「オシャレ」は、思想ともなり行くのである。》

橋本治が説明するまでもなく、1972年は、「元日本軍兵士の発見」と「連合赤軍兵士による銃撃戦・リンチ殺人事件」とで幕を開けた。まだ学費値上げ問題で全国86大学で闘争中であったし、セクトの内ゲバ・リンチ殺人も頻繁に起こっていたが、アメ

リカの地上軍もベトナムから撤退してベトナム戦争自体が終焉を迎えつつあった。60年代末に燎原の火の如く広がった若者たちの「異議申し立て」は、現行秩序維持勢力からの「力による問題の排除」として押し潰されつつ、時代は「繁栄＝空虚」へと雪崩れ込んで行った。若者たちの反乱が「連合赤軍兵士による銃撃戦・リンチ殺人事件」のかたちをとって収斂していったとき、時代の息苦しさや欺瞞に抗おうとするあらゆる反逆が一気に勢いを削がれていった。反逆が凄惨な自滅を辿るほかないことを思い知らされたのだ。元日本軍兵士の帰還と連合赤軍兵士の自滅とが交差したところに、1972年はぽっかりと大きな口を開いていた。

ところで、「元日本軍兵士の発見」には伏線が敷かれていた。若者たちの「異議申し立て」が東大・日大闘争を頂点とする「大学闘争」として、高校生まで巻き込みながら全国的に展開されつつあった1969年の1月2日、元日本軍兵士の奥崎謙三(48)が一般参賀の人々の前に現れた天皇めがけて、「ヤマザキ、天皇を撃て！」と叫びながらパチンコ玉を撃つ事件が起きている。「ヤマザキ」とは奥崎と共に岡山から九江工兵隊に入隊した山崎上等兵であり、奥崎は過酷なニューギニア戦争体験を共にした戦友たちの無念さを心に刻みながら復員したが、彼がそこで見たものは、「戦争であれほど多くの尊い人命を犠牲にしておきながら、本質的には昔とほとんど変わらない社会」であり、「超A級の戦争犯罪人である天皇が、あいもかわらず大きな顔で日本国民の象徴として認められ」ている現実であった。陳情書には、「飢えて死んでいった多くの戦友たちや無数の戦争犠牲者のことを考え、いつもがまんがならない激しい怒りを燃やしていました」と書かれている。

《太平洋戦争も 激動の1960年代末 も、終わらない人の中では終わらない》と橋本治は書くが、「1969年」の項で彼自身、《根本を無視した「力による問題の排除」が 根本的な解決 となるわけではない》と記していたように、 根本的な解決 の欠落が「終わらない人」を次々と出現させることになるのも必然であった。太平洋戦争が「終わらない人」の一人である奥崎謙三もまた、身は復員しながらも心は戦友たちと共に、ニューギニアの戦場を敗走していたのである。その三年後に、身も心もグアム島の戦場にあった元日本兵・横井庄一が発見されたのだ。発見の一週間後に特別機で東京・羽田空港到着の第一声は、「帰ってきました……恥ずかしながら」であったが、この「恥ずかしながら」は、敗戦で戦争の決着がついているにもかかわらず、28年間もジャングルの中を逃げまわっていた自身の姿に向けられた言葉として多くの人は受けとめ、流行語として広まった。

確かに着の身着のままの乞食同然の姿で発見され、身の置き所が無い居心地の悪さを感じとっていた横井さんは、自身に向けた戸惑ったような呟きとして発していたと思われるが、しかしながら、たとえそうであったとしても、「恥ずかしながら」という元日本軍兵士の、いや、28年間続いていた日本軍兵士の第一声を聞く戦後の日本人の側は、自分たちに向けられた言葉として聞き取る必要があった筈である。そうでなければ、戦

争が終結したことも知らずに28年間もジャングルで生き続けてきた兵士の姿を、滑稽なものとして突き放して自分たちを傍観者的な位置に押し込んでしまうことになるからだ。実際、「恥ずかしながら」という言葉は横井さんの意図を超えて、我々日本人に向けられたものではなかったのか。横井さんが28年ぶりに戦後日本の社会に亡霊のように現れた姿に滑稽さが感じられるとすれば、その滑稽さは戦後日本人の自画像でもあったにちがいない。

「元日本軍兵士の発見」は「力による問題の排除」が軌道に乗って、繁栄の時代が一段と押し進められつつある1972年であった。「発見」が「力による問題の排除」に対する抵抗が高まっていた時であれば、戦後も27年間兵士でありつづけたという事態は問題として受けとめられる余地があったかもしれなかったが、空虚の加速と同義である繁栄の時代は、もはや「元日本軍兵士の発見」を時代錯誤の異和感としてしか受けとめなかった。問題として受けとめる余地をすっかりなくしていたのだ。横井さんから感じられる滑稽さはすべて横井さんに返して、我々戦後日本人にまで及んでくる滑稽さとして受けとめず、安全地帯を確保しつづけた。横井さんが帰還した戦後日本の社会で生きていくために、サバイバル体験を生かした講演活動を行ったのは、道化の役割を演じ続ける以外になかったということを示していた筈だ。二年後に発見された小野田寛郎陸軍少尉(51)が翌年に兄の住むブラジルに移住したのは、期待されている道化の役割を拒否したためである。

「元日本軍兵士の発見」が時代錯誤の滑稽さを醸しだしていたなら、「連合赤軍兵士による銃撃戦・リンチ殺人事件」は時代錯誤の惨事を浮き彫りにしていた。繁栄の時代はそう感じていた。だが、もしかすると「元日本軍兵士の発見」のほうが惨事であって、連合赤軍兵士の事件のほうが滑稽であるかもしれなかった。そう捉える視点が生みだされてくる余地をもたないのが、繁栄の中の空虚さであった。東大闘争真っ盛りの1968年11月22日に、学生の「自主管理」による駒場祭で「とめてくれるなおっかさん 背中のおちょうが泣いている 男東大どこへ行く」のポスターを描いた、当時東大生の橋本治は30年後も、緋牡丹お竜を演じた藤純子の引退が全盛を極めたヤクザ映画の終わりと共に、その 美学 の終わりであったという記述に多くを割くが、ヤクザ映画の美学の終焉は学生運動の美学の終焉でもあり、連合赤軍事件は学生運動の美学を断ち、遂にヤクザ映画の美学をも断つたといえる。

繁栄の時代は脆いものであるということ、高度経済成長になんの不安もなく乗っていた日本国民に徹底的に思い知らせたのは、1973年のオイルショックである。オイルショックは、《夜の町からネオンが消え、飛行機の便数が減り、自動車のスピードが落ち、そして暖房の温度が下がる》という事態としてやってきたが、もちろん、日本ばかりではなく、世界中がオイルショックに見舞われた。しかし、オイルショックが最も身にしみたのは、《中東戦争から一月もたたない内、トイレトペーパーや洗剤が日本中の店頭から姿を消した》出来事であった。飛行機に乗らない人も、自動車に乗らない

人も、そしてネオンに関係ない人も、トイレトペーパーや洗剤の店頭からの消失には青ざめた。オイルショックに慌てた日本政府は中東の産油国に特使を送って、「日本に石油を送って下さい」外交を繰り返すが、「《中東問題の複雑も理解せず、アラブ諸国と普段から友好関係を保つ努力もせず、困った時だけただ 石油売って下さい と言う日本の思想性のなさはなんだ」と非難したのは、外国人ではなく、日本の知識階級だった。》

オイルショックは石油に依存していた世界の国々に、「石油がなくなればどうなるか？」という深刻な問いを突きつけ、その結果、石油消費国の人々に「省エネ、省資源」の発想を植え付けるが、オイルショックはやがて収まる。オイルショックによって、《原油の値上げをしたペルシア湾岸の産油国は、一時的な大儲けをした》ということもあって、《「オイルショックとはなんだったのか？」ということの答には、「戦争を口実に使った産油国側の値上げ戦略もあった」ということである》と、橋本治は総括する。そうであるなら、《「中東問題の複雑」も理解せず、ただ石油ほしさでアラブまで出掛けて行った日本のやり方は、そうそう間違いではなかったということになる。戦争をすることの利害なんかは、戦争をする当事者にしか分からない。よその国がそれに介入するのは、介入する国なりの思惑があつてのことで、それであれば、介入しない国には「介入しない国なりの思惑」があつたていいのである》という、日本の石油外交に対する肯定的な評価が生まれる。

《オイルショックがあつて、それで日本がどうなったのかは分からない。その二年前、ドルショックで円を切り上げ、オイルショックの8ヵ月前、1973年の2月には、円が変動相場制に移行した。しかし、円は強かった。いかなる「国際情勢」とも無関係に、日本は世界最強の経済大国になった。日本は自力で勝つたのである。日本はあらかじめ、それを知っておくべきだった。そうすれば、日本は国際社会の「強い紳士」になれただろう。

知って勝てば紳士だが、知らないで勝つのは成り上がり者 - 国際社会とは、どうもそういうルールで出来上がっているらしい。しかし日本は、そのことだけを知らない。それで日本は、いつもオドオドしているのだ。》

オイルショックによる危機を自力で乗り切つて、《日本は世界最強の経済大国になった》が、そのことが国際社会でどういう意味を持つのかを、日本は知らなかった。だから、《日本は国際社会の「強い紳士」になれ》なかった。橋本治はそういう。オイルショックの今日まで日本は、「世界最強の経済大国」を保持しつつけているにもかかわらず、同様に依然として《日本は国際社会の「強い紳士」になれ》ないまま、《いつもオドオドしている》が、その出発点はオイルショック時に起因していたということだ。つまり、「世界最強の経済大国」になった日本は、そのことに自覚的ではなかったから、そのことに《いつもオドオドしてい》なければならなかった。なぜ、自覚的ではなかったのか。それは、日本が「世界最強の経済大国」になろうとして、国際社会とのしのぎ

を削る競争の中で、その座を獲得したものではなかったからだ。もちろん、日本の各企業が世界の企業との熾烈な戦いをそれぞれに繰り広げてきたとしても、日本の国力としての全体の経済力にまでその戦いが集結されていることは誰にも読めていなかった。

世界の超最強のアメリカの経済力は長期的なベトナム戦争への介入によって疲弊していたし、おそらく日本の経済大国化は自力で申し上がっていった感じではなく、西欧諸国の衰退によって押し上げられていった感じであったために、日本は自信も自覚も伴わなかったであろう。気がつくやうに、先頭に位置していたという感じであった。では、後から自信や自覚を備えるようになればいいではないか、ということになるが、しかし、何年たっても日本は「世界最強の経済大国」に見合った《国際社会の「強い紳士」にな》ることはできなかった。日本という国家の最大の問題点が、そこに浮き彫りにされていた。「世界最強の経済大国」へのルールを敷いた日本の繁栄が、若者たちの「異議申し立て」を封じ込めてきた「力による問題の排除」によって押し進められてきことからすれば、「力による問題の排除」が思想の排除としても貫徹されていったところに、日本国家が自己を超える思想を持ちえないことの原因を覗くことができるかもしれない。

1974年に入って、日本赤軍の若者たちが世界で暗躍しているニュースも伝わってくるし、4月には国鉄が初めて全面運休するなど、公労協・官公労などがスト権奪還・賃上げ要求を掲げて空前のゼネストに突入し、日本列島が二日間マヒに陥ることもあったし、また「東アジア反日武装戦線」を名乗る若者が、連続企業爆破事件を惹き起こす動きもあったが、広がりも勢いもない孤立した様相で、60年代末期を覆い尽くした時代の熱気もうねりもはや遠去かっていた。1972年に大学に入った、後のニューミュージックの女王、荒井（松任谷）由美が、《全共闘の時代の痕跡がまだ残るキャンパスの風景を、ただ「汚い」と見た》感性によって、時代がまわっていることをまざまざと実感される日々が続いた。そんな中、日本の総理大臣田中角栄が金脈事件によって、アメリカの大統領リチャード・ニクソンがウォーターゲイト事件によって、それぞれ辞任に追い込まれたのが1974年であった。

「1974年」について書く橋本治は、それしか書くものがないというようにして、日米トップの辞任を取り上げる。辞任の二年後に田中角栄はロッキード事件で逮捕されるが、《この時も日本国民は、まさか日本の前総理大臣が逮捕されるとは思わなかった。日本人というものは、どうやらとことん、政治家を信用していないのである。「悪いことをしても決して逮捕されないほどに悪い」 - それが日本国民の思う政治家なのである。》橋本治が指摘する政治家に対する日本国民の不信の深さは、人気宰相小泉純一郎の出現によっていくらか払拭されたかにみえたが、逆に根強くなったのが感じられる。政治家に対する国民の不信は国民に対する政治家の不信であり、国際社会で《いつもオドオドしている》日本は、政治家と国民の関係が信頼ではなく、不信の念でつながっていることを国際社会で晒けだしているのである。

2005年3月27日記